

ようかい となりの妖怪



てんじょうねこ

さむ へ や ひ とり さび と き
寒い部屋で一人で寂しくしている時、

てんじょう な
天井から「にやあ」とかすかな鳴き

こ え き み てんじょう
声が聞こえてくる。よく見ると天井

す き ま か お い ち い こねこ
の隙間から顔を出している小さな子猫

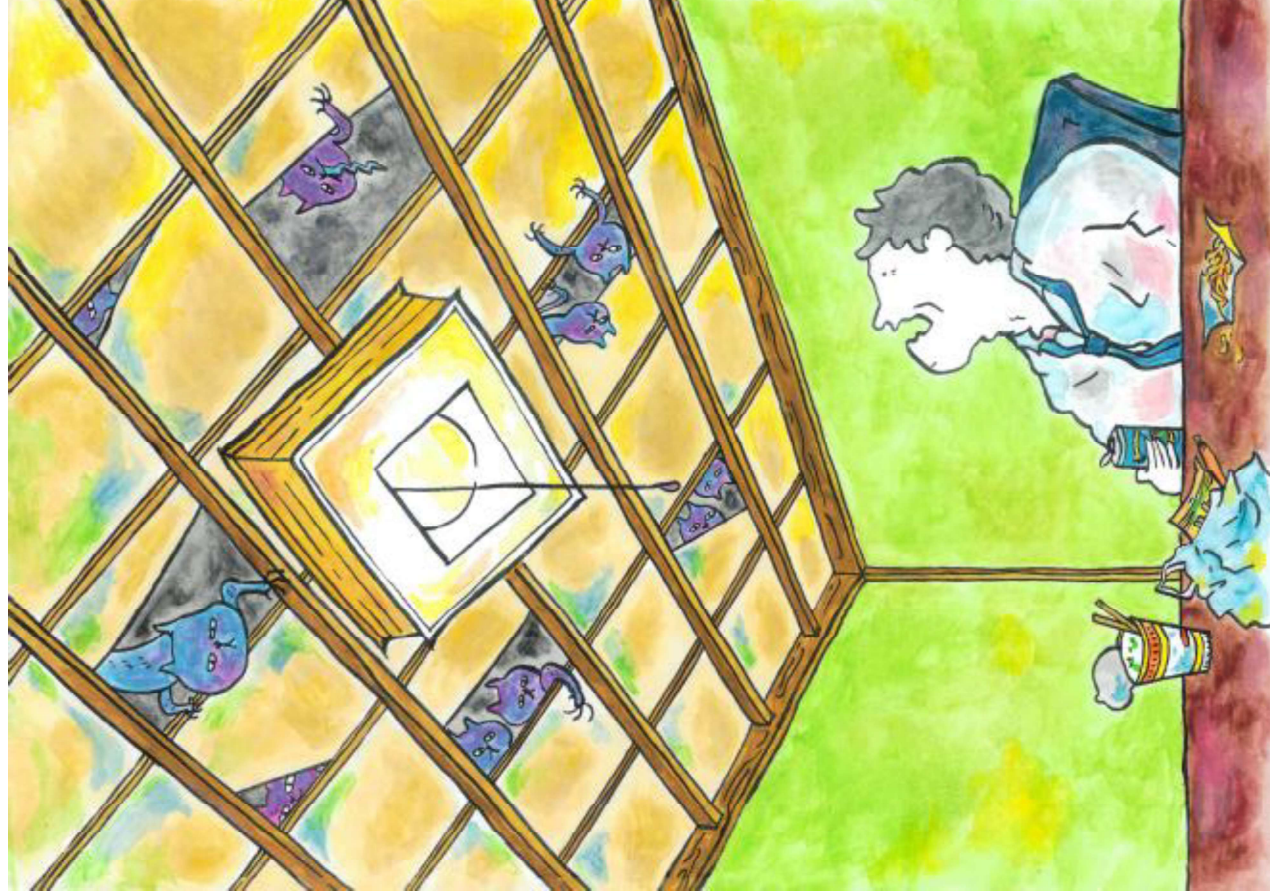
が「にやあ」と鳴いている。寂しい夜

なので、「あら、こんなところに」と

おも 思ってもう一度よく見るともういなく

なっている。しばらくしてまた「にや

あ」。てんじょうねこのしわざであ
る。



うきわぼうず

なつ おおあめ ふ まち こうずい
夏に大雨が降って町が洪水になる。

きんじょ いえ なか みず はい
近所のひとたちは家の中に水が入らな

いそが いよう 忙しい。その横で

「すずーい、すずーい」と言いながら

みずぎ う わ すいはいぼう
水着に浮き輪、水泳帽をかぶった

い もの みず およ
生き物がたまった水を泳いでやってく

る。近所の人たちは手を止めて「あら

あら」と言いながらも楽しそうに眺め

ている。うきわぼうずはその様子を

たしか みず もぐ
確かめると水に潜っていないなくなって

しまう。



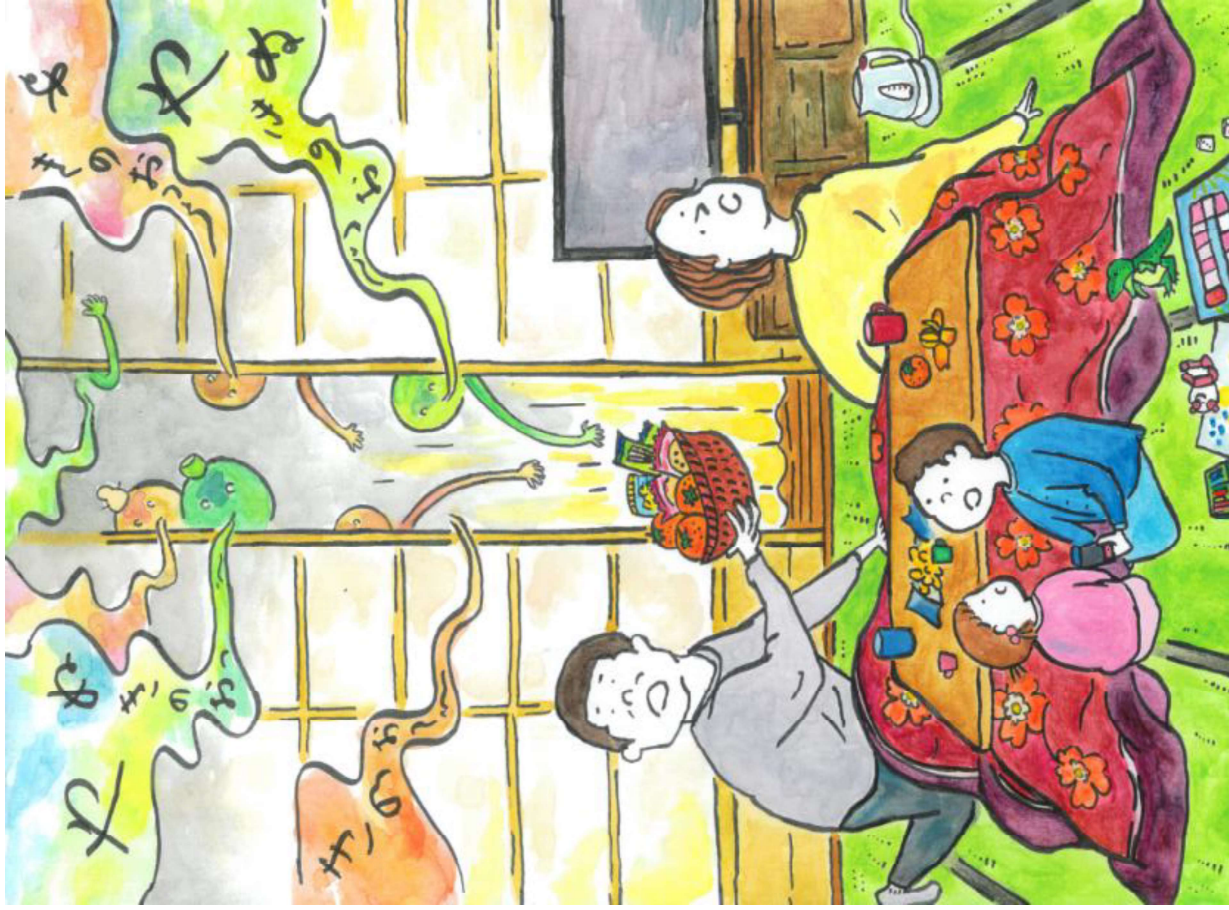
おちやにこおり

あつ なつ よる よなか 夜中にのどが^{かわ}渴いて目
暑^さ一い夏の夜、水^{みづ}を飲^のもうと台所^{だいどころ}に行く
が覚^さめる。と、ちいさい小僧^{こぞう}が湯呑^{ゆのみ}をだして「お
ちやにこおり」と2回^{かい}言^いう。湯呑^{ゆのみ}にお
茶^{ちや}を入^いれて氷^{こおり}を足^たしてやると、もう
一^{いちど}度「おちやにこおり」と言^いってどこ
かに行^いってしま^{ゆのみ}う。湯呑^{ちや}にお茶^いを入^いれ
てやらないと、いつまでもそこにい
て、水^{みづ}を飲^のむのを邪魔^{じやま}するとい^いう。



やぬきのおつ

冬の夜、こたつに入っているところから声が聞こえる。「やぬきのおつう、やぬきのおつう」声はそう言っている。こたつの上のっているせんべいやみかん、あめなどをおさらいにして障子の外に置いておくとなくなっていくという。これをしないと、いつでも声が聞こえる。幼い時におやがもらえなかった子供たちの気持ちが集まって妖怪になったと言われている。



かたたき

寒い冬の夜、幼い子供といっしょに
 寝ている母親が誰かに肩をトントンと
 たたかれて目が覚める。ふと見ると
 一緒に寝ている子が足で布団を蹴飛ば
 して寒そうに縮こまっている。母親は
 風邪をひかないよう、子供に布団をか
 けてやる。大切な人を見守る、優しい
 妖怪のしわざである。



ありのみち

ゆめ なか 夢の中で「手がいたあ、手がいたあ
い」と誰かがささやいている。目を開
けると、壁の穴からたくさんの蟻が寝
ている人の手を食べにきている。どん
な人の手を食べに来るのかはわからな
いが、妖怪「ありのみち」が蟻を連れ
てきているのだと言われている。



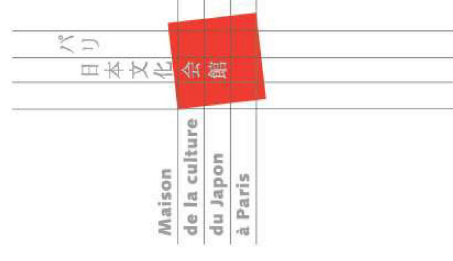
ようかい となりの妖怪 レベル3

2024年9月1日発行

編著：三浦多佳史

挿絵：中川歩美

監修：MCJP ぼくよむ文庫制作チーム



国際交流基金パリ日本文化会館日本語事業部